

Title	「交わり」の問題を中心として
Sub Title	Around the problem of "Umgang"
Author	小林, 澄兄(Kobayashi, Sumie)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1965
Jtitle	哲學 No.47 (1965. 12) ,p.103- 124
JaLC DOI	
Abstract	<p>Among many educational works of Theodor Litt (1880-1962), "Das Bildungsideal der deutschen Klassik und die moderne Arbeitswelt " has not yet been introduced to Japan, I understand. This was published at first "als Heft 15 in der Schriftenreihe der Bundeszentrale für Heimatdienst in Bonn" and appeared as a separate volume in 1959, the 3 edition of which has come to my hand recently. As I have realized that it is valuable enough to summarize the content of this book partly and add some of my opinion relating to what the author says, I dare to do this here. The following is the essence of his standpoints: "Das humanistische Bildungsideal, das als Vermachtnis des klassischen Zeitalters auf uns gekommen ist, wird von Theodor Litt unter dem Gesichtspunkt geprüft, wie weit es noch unserem Zeitalter angemessen ist. Es werden an ihm diejenigen Züge aufgewiesen, in denen es diesem Zeitalter widerstreitet. Es wird aber auch das ins Licht gerückt, was in der Ideenwelt der Klassik 'an Ahnungen kommender Entzweiung und Weisungen zu ihrer Bemeisterung' enthalten ist. Nur so kann die Frage beantwortet werden, wie die 'Menschlichkeit' auch unter den Bedingungen des modernen Arbeitslebens zu retten ist." According to his opinion, Die Menschlichkeit" should be always maintained and developed through "Umgang", "Begegnung" or "Kommunikation" between oneself and others-subject and object. This relation consists of both antinomy and identification. Modern arts and sciences and " moderne Arbeitswelt" are becoming more and more isolated from "Umgangswelt". But any scientist (any technician or any labourer) could hardly be indifferent to "Umgangswelt" after all. If some one were a real worker, not a mere labourer, he should be more and more a real partner of "Umgangswelt ". In the opinion of Goethe, "handwork " might be a most excellent way to "Umgangswelt." In this respect, he was a representative advocate in modern ages and Kerscheneister was worthy of the name as a most influential successor of the former in the same point. Litt conceives that there should also be a relation of antinomy and identification between "Arbeitswelt" (or arts and sciences) and "Umgangswelt" and at the same time, there should be just the same relation between "Das Bildungsideal der deutschen Klassik und die moderne Arbeitswelt." Although I do not know whether Litt's "Dialektik" as abovementioned might be unconditionally supported by every man, I myself am very much inclined to admit his above-mentioned views in general.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000047-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「交わり」の問題を中心として

小 林 澄 兄

近代におけるドイツの教育学界で第一人者の一人であったリット(Theodor Litt)は、1880年に生れて1962年に亡くなった。かれがボン大学の教授を定年でやめたのは、亡くなる10年前(1952)であったが、私が同大学にかれを訪問して、あいにく不在とのことで、面会できなかった1953年には、多分名誉教授として講師を兼ねていたのではないかと思う。

かれの著作目録は、ボン大学のホオンシュタイン、ニコリン両博士の調査したものにもとづき、目下滞独中の鈴木謙三氏によって昭和38年ほとんど完全に近いものとして紹介された。それによると、単行本は53冊、論文・講演の類は208篇となっている。

私が以下においてとり扱おうかれの本は、“Das Bildungsideal der deutschen Klassik und die moderne Arbeitswelt”と題され、はじめ「郷土への奉仕連盟」出版の叢書の1篇であったが、のちに別の単行本として公けにされた。この単行本の改訂出版は、1959年のもので、さらにその第3版に当るものを私は最近手に入れて読んでみた。

これによって啓発されたところが少なくないが、そのなかで「出会い」の問題に1つの重点がおかれている部分がとくに私の注意を喚起した。実存主義における出会いは、“Begegnung”ということばでいいあらわされ、実存主義を克服しようとするボルノウのごときもこの原語を用いている。リットが“Umgang”ということばをしきりに使っているのは、やはりかれが独自の立場から出会いの問題ととり組んでいるわけである。ヤスバ

「交わり」の問題を中心として

ースの実存哲学では、「交わり」(Kommunikation)が1つの中心概念となっているが、これも出会いを問題としているといってよい。ウムガングという原語を邦訳するとき、出会いとするよりも交わりとした方が適当であろうが、出会いという訳語をこれに当てても差支えなからうということとは、リットのいうところを吟味してみた上での私の感じである。

リットは、前記の本の最初の個所で、まず自然との交わりについて述べている。「私のごとき人たち」(Meinesgleichen)との交わりは、われと汝(Du)とのそれであるが、人間以外の自然との交わりは、科学的研究や技術的加工におけるごとき、ある対象(Objekt)とのそれである。前技術時代においては、ある対象との交わりであるよりも、むしろ自然そのものとのそれであった。同じ自然との関係であっても、前技術時代のそれと科学的・技術的のそれとのあいだにははっきりしたちがいがあり、そのちがいは、後者に「理論」と「実際」との関係が定立するという点である。前技術時代の理論は、実際のうちに、実際とともに、実際における契機としてのみあり得るに過ぎず、両者はただ混ぜこぜになっていた。このような混ぜこぜの状態——理論的でもあり实际的でもある——要するに自然そのものとわれわれとの関係こそ、本来的の意味での交わりである。

近代および現代は、科学・技術時代だといわれるだけあって、自然そのものから、またそれとわれわれとの関係からますます遠離するに至った。ルソウ(1712—78)のごときは、かれ独得の自然概念から出発して、この傾向に反逆し、フマニテエト(人間性)の擁護者として先頭に立った人であった。かれに後続した、人間性の擁護者・「救世主」たちから見ると、目前の時代は、人間を人間たらしめない分裂(Zerrissenheit)の時代であるから、自然そのものならびに人間の自然を重んじて、われわれとそれとの交わりを深くし、全人(Vollmensch)を形成するための統合(Totalität)の時代たらしめなくてはならぬと考えられた。現代の教育思想家たちのな

かにも、この意味で、近代までの人間性復帰運動に郷愁を抱いている人たちが見受けられるようになった。

リットにいわせると、近代から現代へかけて、科学・技術時代であるという代りに、「労働秩序」(Arbeitsordnung)の時代だといってもよからうが、この秩序のもとに、何もかも分業分業で、われわれは、これに対応するために、全人でなくてもよさそうになってきた。ヘルダー(1744—1803)の時代であってさえも、かれは、いよいよ機械(Maschine)の時代の到来をみとめ、人間の機械化・「非自己化」(Entselbstung)を心配した。国際的・法律的・社会的の機構にしても、「利益社会の技術」(Technik der Gesellschaft)・「事象的思惟」(Sachdenken)によって運営され、人間疎外は必然化するものと憂慮した。シラー(1759—1805)はシラーで、「自分自身の喪失」(Verlust seiner selbst)を次のようにいいあらわし、今やわれわれは、何とかしなくてはならぬ羽目に陥っているとし、かれの『人間の美的教育に関する書簡』(1795)は、全篇を通じてこの警告で充ち満ちている。その一節にはこうある。

「全体が1つの断片になってしまった。人間はみずからを断片たらしめてしまう。かれが追い廻わす一本調子の雑音のみが耳に入る。かれ自身の本質のハアモニーなどが生成するはずはない。かれの自然のうちに形成される代りに、かれはただ、かれの外事の、かれの科学の複製となるほかはない。」

ペスタロッツィ(1746—1827)は、ヘルダーやシラーが新時代の1種の社会悪と看做したところのものを、かれなりの仕方で表現した。かれのいい方をもってすれば、「世の中に何のかかわりもない」「熟練本位の継子たち」は、「文化の破滅」を来たす力によって、「十二枚折りにちぎられた人間の断片」(Bruchstücken einer Duodezmenschlichkeit)となってしまう。いわゆる文明は御免である。これに反して文化は「集合的存在」であって、集合的(相互的)存在は、各個人の要求と人類の高遠な見通しとがいつ

までも対立するところに成り立つべきものである。

リットは、さらに進んでヘルダーリン (1770—1843) を、とくにゴッテ (1749—1832) を引証している。ヘルダーリンから見ると、ドイツ人のあいだには、本当の人間がいなくなってしまった。本当の人間性の充実を期した古代ギリシア人のごとくであるなどは、思いもよらぬ始末である。古代ギリシア人がそれほどりっぱであったかどうかは、疑わしいけれども、とにかくかれには、過去へのあこがれが随分強かった。ゴッテが上記の人たちと同様に、人間の機械化を深憂したことはいうまでもないが、かれの晩年においては、『ウィルヘルム・マイスター遍歴時代』(1829)——とくにその「教育郷」のなかで、かれの教育思想の円熟した極致が明示されている。このことについては、私の『西洋教育史概説』(1961) から次の1節を引用しておく。

『遍歴時代』には、社会的活動の理想がいっそう強く要求されている。何ごとにも“抑制”が必要とされ、協同社会のうちに自己を秩序づけること、しかも敬虔へのエトスによって行為すること、このことによるのみ人格完成への道が開かれるゆえんが説かれている。

——われわれにわれわれ自身を支配する力がなくて、われわれの精神を自由にするごとき事柄は、すべて有害である。——

道徳的理想にわが身を献げ、

——何らかの高い、純粹な、人智ではとうてい知り得ないものに、みずから進んで、感謝をもって献身する。——

このような敬虔な努力のうちに、神の支配が体験される、と見るに至ったゴッテにとっては、生成はもはや単なる自然的生成ではなくて、真の礼拝の対象でなくてはならぬ。

ところがゴッテのこの社会的・道徳的の教育は、実践的行為との共働によってのみ実現される。

——考えつつ行ない、行ないつつ考える、このことこそあらゆる智慧の総和である。——

とは、『遍歴時代』における「教育郷」の理想的教育の状況を約言したものであって、この教育は、徒らに知識を授受するとき、また徒らに美的陶冶を偏重するとき学校では行なわれず、見事に分業化され、儀礼と祝祭とで秩序づけられている特殊の生活協同社会・労作協同社会において、「日日の行動」を営んで行くところに、はじめて実を結ぶものと看做されたのであった。」

リットが指摘している通りに、ゴエテはけっきょく古典的・市民的の文化の時代の過ぎ去り行くのを食いとめ、これと生産社会を抬頭させようとする新時代とのあいだに、何とかして橋渡しをしようとしたのであった。

「たわけ者一般的陶冶!」、**「今や特殊であるべき時代である。」**「一事を正しく知りかつ行なうことは、百事の半可通よりも、より高い陶冶であり得る。」

というゴエテのことばは、かれが前時代の陶冶を一概に排除しようとした意味のものと解されてはならぬであろうと私には思われるが、リットは、まずこのようなことばを引用するとともに、次のように述べている。

けだしゴエテは、「自然」の資料と諸力とをもって自己測定をし得る能力をもつことが大切であるとし、手は「人間となるため」の器官として貴重であるとし、フマニテエトは、われわれが純粹な精神(内面性)の領域から出て、外的な世界を自分のうちにとり入れるところに成り立つと考えた。かくて以前からのかれは、人文主義的運動と近代の労働分業主義的生活秩序とを対立させることを留保し、特殊的に手工的生産をすることにも十分の教育的価値をみとめようとした。そこでフマニテエトの擁護者たちが労働秩序による非人間化を心配したのに対して、ゴエテは、その杞憂であるゆえんを明らかにしようとしたことになる。しかし技術に伴なう危険をどこまでも疑わない人たちから見ると、技術によって支配される労働

「交わり」の問題を中心として

秩序には、われわれにとってためになる、教育的の価値が十分にあるという「教育郷」におけるゴエテの言説が果して即座に受け容れられたかどうかは、たしかに1つの疑点であった。

理論的研究と実際の適用とを対立させたゴエテの考え方は、『遍歴時代』よりも『色彩論』(1808—10)に立ち戻っていっそうよく窺われるが、かれは、両者を対立させながら、両者の連帯性をみとめずには措かない。また新時代の労働秩序とそれを可能ならしめる科学的の自然研究との関係の密接なことを説いた点において、「教育郷」と『色彩論』とは軌を一にしている。しかし自然(世界)と人間との交わりについては、「教育郷」によってとくに教えられる。自然(世界)と人間との交わりは、自然科学的・技術的の説明からは区別されなくてはならぬ。それは、自然(世界)と人間とのあいだに一定の釣り合いが保たれる、一種の「道徳的」の秩序が存することであって、数学的の自然科学をしてこの秩序を乱ださしめてはならぬと考えられ、『色彩論』にしても、一種の人間学であって、数学的の自然科学の認識形式とは異なることを説く。この点では、「教育郷」と一致する。「教育郷」はしかし数学的の自然科学の認識形式からは、また技術的・経済的の労働世界からは、はっきりと区別されるべき自然(世界)と人間との交わりを『色彩論』以上に切論している。

「教育郷」における「労働(活動)の特殊化」は、技術的・経済的の労働世界からはどこまでも区別されるべきで、それは、各個人の素質の相違という観点から要求されるべきことで、教育は、この相違に適合するようにして、各個人の労働(活動)の特殊化を図らなくてはならぬ。ゴエテ自身のことばをもってすれば、「いかなる素質・才能をも誤り導かないということこそ、われわれの最高の、神聖な原理である。」素質・才能に適合するところの特殊的の活動が何か断片的な事物をつくり出すとか、何か当てがわれた事柄をし遂げるとかではなくて、自分自身のうちに何か意味のある全体的なものを身につける足しになるときに、それははじめて教育的効果

をもたらしたことになる。かくて当人から「第2の自我」が生れてくるわけである。

自然(世界)と人間との交わりを前に述べたような特殊的活動によって成り立たせる、この特殊的活動のなかでも、ゴッテが第1に重んじたのは、手工的活動であった。これが嗜れやかな歌の唱和と相俟って行なわれることのすばらしさが推奨されている。

またゴッテは、フマニテエト理念のもとに、次のことを説いてやまなかった。すなわち人間は、その責任を果す行為をして、世界を相手とし、世界に適合し、世界のためにつくし、もってはじめて人間となることができる。各個人としては不完全であるから、「世界と結びついて全体的存在を形成する」ことになる。この意味で、各個人は、世界への開かれた眼をもつことができる。この世界が機械化されて行くことに何のとめどはないにしても、人間の理想が減び去るものとは信じられない、と。

ところがシラーの歴史哲学は、機械によって代表される労働形式や労働秩序が人間的な神聖な領域に入り込むのではやり切れないとして、後者のみに思いを寄せていた。

それからペスタロッツィが「集合的」と「個人的」との存在を対立させ、かつ合一させようとした点で、ゴッテと異なるところはなかったが、前者は、この考え方を背景にとどめて、明るみに出さなかったのに対して、後者は、それをはっきりと持ち出したのであった。

リットは、以上にとり扱ってきた諸問題と関連して、フムボルト(1767—1835)がどのような考え方をしたかを明らかにしている。フムボルトは、人間が自分自身となる過程から外的世界を除外しようとはしないで、外的世界の共働は、人間が内的の諸力をはたらかせてそれらを形成するために必要な「素材」として役に立つものとみとめたのであって、フィヒテ(1762—1814)が「自己陶冶への資料」といったのと一致する考え方をしたので

あった。かくて外的世界は、人間が自己陶冶をするための營養物に過ぎず、人間が全体的存在となるための本当の共働者ではないことになる。外的世界と常に触れ合う人間は、その捕虜となってしまうと、自分自身となり得ない危険が生じるのであるから、外界と内界との隔離を期さなくてはならぬ。この隔離があってこそ、内界は、「人間的人間」(Homo humanus)として統一される作品となることができる。

このように見るフムボルトは、行動するということが、人間の内界を徒らに外界と混同させることになると心配し、行動する代りに外界を熟視することによって、外界を自己薬箠中のものとし、外界を変化させるべきだとし、自分自身は「静観する存在の上に成り立つ」ことを期すべきだと説いた。そうしてかれは、このことを説いただけではなくて、かれ自身実際にそうであるべく努力した。よし行動するにしても、自分自身の本質のうちに具わる法則によって、「独得」の行動をすべきである。「われわれの行動が世間のあれこれに頓着せず、ただ内的の見解・内的の考量に対して重要であるとすれば、それこそ偉大な天の祝福である。」

リットは、われわれのおかれている位置に対する道徳的の自己証明をしつづけて行く人間らしい人間の信仰告白ともいえるものが、フムボルトの以上のような「フマニテエト哲学」にみとめられると述べ、ゴエテの次のような見解を思い出させるといっている。ゴエテにいわせると、「世界と結びついてある全体を形成する」のではなくて、他に別のタイプがある。それは、「現実的生活の前に一種の恐怖を感じ、自分を自分自身のうちに引き戻し、自分自身のうちに独得の世界をつくり出そう」とするものである。この独得の世界とは、「現実」によるあらゆる汚濁から脱却するところの「内的」の世界にほかならぬ。現実には単なる、荒れ果てた世界でしかないと考えるのであって、もちろんゴエテは、この考え方に同意しなかった。フムボルトは、短期間ではあったが、教育行政家として、その「フマニテエト哲学」にもとづく教育改革のためにくつし、いちじるしい業績を

挙げたけれども、いわゆる「外的」の世界の急速な発展との何らかの「和解」を必要としないわけには行かなかった。

次にニイトハマー (1766—1848) がリットによって引き合いに出されている。『教育理論における汎愛主義とヒューマニズムとの戦い』(1804) は、ニイトハマーの著書として有名である。かれは、「内的」のものを偏重する教育学と「外的」のものに重きをおくそれとを比較して、次のように論じた。「外的」という一般的概念には、一種の補足を必要とする、それには「内的」なものの従属性が附帯しなくてはならぬ。「およそ生産とか産業とかを優先させる傾向」は、「外的」なものであり、「現実的な有用性への要求であり、現実的な有用性は、利得を、物的の生産を意味する。」そこで数学・物理・化学などが重んじられる代りに、主として「内的」な人間をつくるための学科がおろそかにされる、と。

ニイトハマーがこのように論じたのは、汎愛主義に不満で、どこまでもヒューマニズムの立場を支持したいからであって、「内的」と「外的」とを対立させ、近代の労働秩序に対して宣戦布告をすることなしには、「フマニテエト教育学」の良心の純粹さを擁護することはできないと信じた点で、かれとフムボルトとは、同じ仲間であったわけである。

リットに従うと、1920年代のドイツの教育界には、クラシイクのものから離れた生活領域・労働領域を教育的に考えて、フマニテエト運動の排他性をしりぞけようとする真面目な理論的・实际的の骨折りがあらわれてきたのであるが、何といてもケルシェンシュタイナー (1854—1932) の業績がもっとも注目されるべきであった。この人こそ、フマニテエト伝統に忠実でありながら、その堅固な壁を打ち破ることにもいちじるしいはたらきをした第1人者であった。物的の世界をとり扱かう労働の「陶冶的」の価値をみとめ、教育行政家としてそれを一教科たらしめ、単なる労働でなしに、「労作」であるべき理論を打ち建てて、クラシイクの教育説に新しくこれをプラスすることを怠らなかった。かれが「労作学校」の理念を説

き明かすに当って、ゴエテの『遍歴時代』における教育的英知を好んで引き合いに出したのも、尤もなことであった。

ケルシェンシュタイナーが身体的労作の教育的価値を力説する場合の、身体的労作に対する位置づけなり、その目標規定なりから見て、それは、ゴエテが高く評価した工作——制作の活動形式と少しもちがっていなかった。そうして前者が「そのなかに」「陶冶的」の価値があるとした労作の諸特性は、後者が「教育郷」において算え上げたものと全く同じであった。労作する当人の「第2の自我」が放出され、さらに自分自身に出ち返る過程を重視した点で、両者の見解に異同はなかった。そうしてその過程には限界があるとしてゴエテの指摘したところのものは、やはりケルシェンシュタイナーにも見出された。生産社会が今日以後よくなる時があるかも知れない、そのときにあらわれる教育上の諸問題を、単なる予想のもとに、かれはその「労作学校」の理念のなかに楽観的にとり容れようとはしなかった。すなわちかれもまたそこに一種の限界をみとめていたのであった。かれのこの控え目の態度は、かれがクラシクの教育理論から絶縁しなかったことを、かれの晩年の大著『陶冶の理論』(1926)において示すことを可能ならしめたのであった。経済的・社会的の発展と教育上の理念的運動との対立は、この対立を克服しようとする教育的意図だけによっては、どうにもならぬことを、ケルシェンシュタイナーの「労作学校」の理論がよく教えてくれる。リットはこういうとともに、以上の両傾向にはそれぞれ自己主張があるので、問題はなかなか解決しがたいことを附言して、かれの本(私の依拠している)の第1章を結んでいる。

(註) 東岸克好訳・小林澄兄解説ケルシェンシュタイナー『労作学校の概念』(玉川大学「世界教育宝典」第20巻)は最近出版された。

この第1章は「歴史的部分」であるのに対して、第2章は「体系的部分」となっている。後者の各節をいちいち追究すると、長くなり過ぎるか

ら、とくにその後半の、「交わり」の問題についてリットの説くところに焦点を向けることにする。

第2章の第2節以下は、もっぱらこの問題を取り扱っている。リットが第1章の第8節までの範囲内で論述した事柄は、主として陶冶の諸原理を明らかにする点にあった。一定の基準にしたがって組織される労働界が展開されるのであるが、そこに生じる生活条件および生活要求にかえりみて、どのような陶冶が行なわれなくてはならぬか、その陶冶の原理は何であるべきかについて論述されてきた。ここでは一応労働界と教育とを対立させて考えてきたことになるが、両者を対立させるのではなくて、世界とわれわれとの交わりに関係に立つところの、ある協同社会のうちにおいて行なわれる教育もあり得ることが併せて考察されてきたのであった。

教育は、以上の両様に考えられるとして、前者は、何かの事象を支配する教育であり、後者は、ある協同社会における教育であるから、両者が別々ものであるごとく、また事象を支配することが、単に交わりの機能の上に立つかのごとき皮相の見解が生じる。それから自然科学や技術の精密さに比べれば、単なる交わりに頼ることの心許なさが指摘される。しかしリットから見ると、世界は、それが感性的・直観的に受取られる現実性をもつとともに、人間は、それとの交わりをし、それと有無相通じる、このことの重要性は無視されるべきではない。交わりによって生じる世界経験を否認するのは、例えば手工的の実際活動における創作形式を否認することになるが、技術的の「発明術」とそれによって人間が恩恵に浴することとは、裏腹の関係にあるのではないか。それから交わりのなかには、人間が自分自身と仲間とのあいだにもつものがある。この交わりに不信を抱くほど馬鹿げたことはない。世界を支配しようとする自然科学や技術が、この交わりによって得られる力を無視してかかっては、おしまいである。

自然科学や技術のためになる教育は、交わりにこだわる教育に優先するとして、旧教育が新教育と入れ換わる時代がきたと簡単に片づけられてし

「交わり」の問題を中心として

まいそうである。いったい優れたものと劣るものとをはっきりと分離して考えることは間違いで、人間と世界との、また主体と客体との相互関係と同じように、優れたものと劣るものとの相互関係がみとめられるべきで、以上のような甲の教育と乙の教育との優劣分離観は、リットのとらぬところのものである。

次に交わりの関係に対して、人間と事象との両極関係を前進させる過程は、例えば1回限りの歴史的の出来事のなかにも生じることがあるが、後進者は、それから受ける結果をわが物とする。この人間と事象との両極関係だけを問題として、交わりの関係を無視することは、とんでもない誤りである。後進者に対して交わりの関係はいつでもよいとして、一途に事象から発足させればよいと考えられてはならぬ。後進者が事象をわが物とするためにも、交わりの関係をまずもって土台とし、それを繰り返えさせなくてはならぬ。しかし後進者がその身のまわりにある事象の門を開くべく迫られている以上、いつまでも交わりの関係にだけこだわっているべきではない。児童の眼前にある過程のうちに、ある事象を「対象」としてみとめ、かつそれをとり扱いはじめる場合、交わりの関係にあった世界を、理論的にも実際的にも、事象へ向って中立化される世界へと変化させることになる。

リットは、このような分析をしてから、次の点を指摘している。理論的・実際的に世界を支配する点ですぐれた人であっても、交わりの関係を引き込めてよいとは考えないであろう。事象を支配することに専念する主体の態度が、思惟の上でも行動の上でも、交わりの関係に対立する限り、事象がかれにとっての世界でありつづけるとはいえ、熱が少しでもさめると、交わりの関係に立ち返るにちがいない。対象化と主体化との結合関係が、消極的にせよ、再現するわけである。深く観察すると、事象の研究者は、事象をとり扱おう行為とともに、自分自身を交わりの方へ向けて行くようである。人間というものは、事象に心身を捧げつつ、しかも自分自身

を圧迫しようとはしない。人格の深奥に横たわる、ある動機が、自己疎外を敢てするといったようなことをしない。研究者の熱心な研究に値いする何かの自然があるとして、それがかれの興味を惹き起こすに足る、ある面をかれに示さないとすれば、それが探究への刺激とならず、探究の産物は何であろうかを多少かれに感づくように示さないとすれば、かれをしてよしやってみようと思わせるもの、相当の努力をかれに促がすことのできるものは、いったい何であろうか、はなはだ覚束ない話である。進んで事象を研究する科学の前には、交わりの関係などは引き込んでしまい、そのようなことはどうでもよいというようなことになったとすれば、事象の研究者の生活態度は、思い知られる。何といても交わりの関係を無視するわけには行かないはずである。

リットの論述は、なおつづけられる。ニュウトン風の科学だけが絶対的の価値をもつものとする考え方に対して、ゴエテが抗議したのは、一応当然であるとしている。交わりの関係に内存し、そこに獲ち得られる「価値」をゴエテが高く評価して、数学的・技術的の考え方の専横ぶりを抑えようとしたのは、やはり一応みとめられてよいとしている。しかしリットは、けっきょく後の両方を否定して、2律背反的の立場を支持すべきだとしている。すなわち交わりの関係において具体的・精神的にあらわれる自然そのものが、科学において抽象的・形式的にとり扱かわれる対象でもあり得るとしている。けだし人間と事象との対立としての2律背反がある以上、対立しっぱなしではなくて、交わりの形式において生じる、自然との出会いが問題とされるべきである。

それから事象にまで形式化される自然と自分自身でありたいと努める人間とのあいだの緊張が、根本的ではないにしても、とにかくそう感じられるのは、いったい何故であるかが問題とされるべきである。人間から見て、全く対象化され、抽象化されてしまう自然そのものは、人間と対立しながら、ある形態において融合される。人間に対して要求するとともに、

人間の答えを捉がず、といったような形態において、相互に出会うのであるから、相互の緊張でも、それは根本的ではなくて、ただそうと感じられる、そういうことになるのは、いったい何故であるかが問題とされるべきである。

人間が出会い、交わりの関係に立つ自然と、事象となり切る自然とに区別される。前者は、客観化される入口に立って、人間の保護者でもあるような恰好で、人間に出会い、やがて引き下がるといったようなものだときめつけるべきではない。いかなる場合でも、人間に対し、人間の存在に対して無関心な不分割性に立ち返えろうとするものだとは断言できない。これに反して人間は、それから話しかけられるとともに、時にはそれによって挑戦されることに気づくであろう。要するに人間が自然と連合するところに真の生活関係があるわけであって、この生活関係がつづく限り、人間は、自然によって自分自身を知り、その存在をみとめ、その価値を信じることができる。自然がかれを押しつぶすときでさえ、自然は、かれと相談する、かれと力較べすることを辞さないからである。ところが事象となり切って、中立化してしまう自然は、以上のごときのものではない。その自然から見て、人間は、もはや特定の相手の人間ではなくなって、一片の木屑くらいのものでしう。事象となり切る自然が人間に対するところの無関心さは、人間存在という抽象性においてのみみとめるので、前記のような生活関係は、人間と事象との対立—相互関係のごときものを硬直させてしまうほどの単なる背景となり終る。かくてゴエテのごときは、人間を事象と結びつく存在から擁護し、交わりにおいて出会う自然にその権利を保障しつつ、そうした自然を、事象にまで中立化し人間を疎外する自然から引き離そうと考えたのであった。

リットの本の第2章第10節は、「交わりと人間陶冶」と題され、次のような設問から説きはじめられている。以上に見てきたような2律背反を人

人間陶冶の面からいかに解釈すべきか。交わりの行なわれる経験の範囲が正しい人間となるために不可欠とすれば、人間陶冶の仕事は、この経験の範囲を保護し育成することを必要とするのか、しないのか。ここに問題がある。第1に2律背反の考え方をするのに反対する向きがある。それを育成するといっても、どの方向へであるか、それを育成するということの真相は、いったい何であるのか、と不思議がる人たちがありそうである。しかし人間は、交わりと見られるべき関係を世界に即してもつものだということに、いつかは気がつく。およそものごとをはっきりと考える人ならば、このことを否定し得ないはずである。

けだし交わりのうちに生じる確かさなどは、いい加減のものだときめ込む人でありながら、かれの理論を基礎づけるためには、それに関係する現実に戻れるほかはない。感性的のいろいろの印象は、かれのドグマから見れば、他愛もない幻像であろうとも、ドグマに無縁な人たちと全く同じように、その幻像は、かれを虜にする。自然科学的・技術的の自負心をもつ人といえども、門外漢と少しも変わらずに、感性的の現実性においてかれに出会うところの自然とかかわり合う。人間についての自然科学またはそれにもとづく技術を専門とする人が、人間仲間との交わりによってかれの自己陶冶に役に立たせる諸経験を尊重し、血の気のない抽象性を犠牲にしても構わないと思う場合もあるであろう。

リットは、ここまで論述してきて、交わりのための特殊の教育的配慮が必要であるかどうかを吟味しようとする。かれの見るところによると、交わりは、われわれが一定の発展段階に達すると、間違いなく自明のものとしてはたらしき、やがて自覚されてくる生活の1形式であると解される。だとすると、それは、教育の対象とはならぬこととなる。それは、自然に生成し得るはたらしきなので、そこに素朴性のあぶなげがないとはいえない。それに対して反省が捉がされるべきことは、たしかである。しかしこのこ

とは、科学の開拓者が試験済みの思惟形式や行動形式の妥当性をふり廻わす、その圧迫力のもとに服するというにはならぬ。その圧迫力は、交わりの生活形式を押しつけようとしながら、却って交わりに依存することを余儀なくされる。そこで、その圧迫力自身が反省を必要とするに至る。いったい反省は、それによって明らかにされた対象を不変のままにとどまらしめるところの、単なる観察ではなくて、その対象の成立にかかわることである。このかかわりは、対象の本質が誤解されていたかも知れないという予想から出直すことであって、この出直しは、以前におかれた位置に復帰することではなくて、新規の立場から考え直すことである。

直前の記述は、交わりのための教育的配慮が必要であるかどうかの問題からややそれたようであるが、交わりは、科学的の思惟形式や行動形式によって圧迫される危険におかれることがあると思われる限り、その危険をとり除くための教育的配慮がどうしても必要であると考えられる。今日の教育は、この点に注意を向けるべきである。人間の出会うところの自然の面に対する感受性を、かれに出会うところの人間界の呼びかけに対する受容性を、どこまでも喚起しなくてはならぬ。世界への信頼を、あやしげな科学的ドグマへの信頼におき換えようとする無数のはたらきが見受けられる今日この際、人間と世界との関係についての賢明な評価をしつづけることが、絶対的に必要になってきた。それから人間は、世界のあらゆる印象から免がれ得ないものである以上、およそ人間陶冶の責任を負わされている人たちが、なすべき義務を果さないで、知らぬ顔をしているわけには行かなくなってきた。今日の人間は、科学の名において生活の全体を支配しようとしたり、科学に属する一定の経験、科学に閉じ込められた一定の活動形式などを固持したりする、その頑固さを打ち挫くことを必要とする。かれの陶冶がよく行なわれるとは、人間と世界とのあいだに横たわる関係をはっきりと意識し、かつその関係において正しく行為する点で、ますますよくなるという点である。

リットのいうところをこのように追及してくると、かれは、人間と世界との交わり関係の重要性を偏重して、いくら偏重しても構わないというような説き方をしているごとく感じられる。次にかれは、人間と人間との交わりについて考察しているのであるが、これまで述べてきた交わりの場合と同様に、ここでも2律背反の問題が深刻であると見ている。人間の世界というものは、理論的にも実際的にも、激しい対立的の考え方・行動の仕方の支配のもとにあるのである。その考え方にもとづく行動の仕方をする支配から、人間を自由ならしめる道は、1に交わりのうちに獲得される経験・交わりに即してあらわれる抵抗力のみである。近代の世界は、人間を労働界に連続吸収する。労働界の特質は、事象をとり扱かうことに存し、各個人に対して、事象をかえりみても、人格をかえりみない労働を要求する。かくて人間は、分業的に組織される同一の生産過程に参加して、その限りお互いに密接に結びつくことになるけれども、この結びつきは、人間と人間との直接的な交わり関係ではなくて、各自が同一の事象に義務づけられることを媒介として、すなわち間接的に、同一の労働関係のなかに位置づけられるということである。その場合、各自は、互いに顔をつき合わせて見たり聞いたりするのではなくて、だれをも拘束するところの事象とかかわり合うだけである。人間と人間との関係が事象による拘束によって基礎づけられる限り、交わりであることを示すところのあらゆる様相を欠くことになる。そこには、1種の社会的理論が観取される。ある社会的秩序の完成は、その秩序のなかにある人間の態度が、交わりに結びつくことを重要視しないほどに、事象の命令に服するか否かによって測定される、そのような社会的理論に事欠かない。事象によってのみ規定される社会的状態のうちに、人間的秩序の理想をみとめるほかはないとする「利益社会の技術」ともいうべき理論が幅を利かすことになる。この技術は、交わりによって協同生活がしばりつけられることがなくなればなくなるほ

ど、ますます人間生活の営みを確実ならしめる、と考えられてしまう。「利益社会の技術」こそは、政治的ユートピアの空想などとはちがって、ただ事象へと打ち込む利益社会の理想を実現させたいと念願するところの、政治的・社会的の体系にはほかならぬことになる。このような社会的理論にリットが賛成しないことは、もちろんである。人間と人間との機能的関係を無視する理論は、およそ人間である以上、いくら事象のみに忠実であろうとも、いつまでも人間であることをやめはしないという点から見ても、成立不可能であることがわかる。いくら事象のみにこだわろうとしても、交わりにおける経験・体験・欲求・要求の世界から全くのがれ出ることができない。労働者仲間、その仕事を分かち合う仲間であるとともに、いつまでも人間仲間である。そこで以上のような理論は、交わりを最低限に引き込ませ、わずかに生活の片端に押しやって、人間的なものごとますます冷淡になり、事象一点張りの存在たらしめようとする。かくてその存在は、事象への奉仕から内面的なものごと逃避しようとする存在と全く対立することになる。しかし一方の存在と他方のそれとを単に外的に区別し、そのいずれかを支持することによって、2律背反を解消させようとする努力においては、両者はけっきょく一致するといえる。

事象にのみこだわる立場からすると、もっぱら生産に従事しつつ、事象にのみこだわる人間としても、やはり交わりとの関係に立つという状態を是認したくない。できればこの状態のなくなることが希望される。この状態のもとでは、生産過程の不確かさ・乱雑さなどが起り、その生産過程が見込みはずれになると恐れられるかも知れない。ところが2律背反に伴なうところの反省は、まず事象にのみこだわる人たちは、何らの術策によってもくずれ去らないほどの、ある事象内容に対して、決して逆らうようなことをしない、という点を予想すると同時に、その事象内容が宿命的なものとして看做されることに必ずしも同意しない。その事象内容は、とり止めにはならないとしても、それに対する見方次第で、それによって捉えられてい

る人間の興味によって変容される。事象によって義務づけられることと、同類項の人間への結びつきとのあいだに、1つの緊張関係があるということは、とうてい否定されるべくもない。否定されることは、われわれの反省にとって、とうてい容認されるべくもない。けだし事象のうちに横たわる要求と人間の思慮分別とは、時に共働するということが、真実でなくてはならぬ。しかしこのような共働の起る事情は、思慮深い予想、行届いた実証、すぐれた適合などを必要としないほどに、常にきまりきっているのではない。それは、単なる所与ではなくて、責任のある形成であるべきである。

事象の世界では、その1部分に変化が生じても、全体に影響をおよぼさず済み得るが、人間と人間との交わりの世界では、その1部分の変化は全体に影響をおよぼさずにはおかない。交わりの世界では、一定の抑制には応じるにしても、他の何らかの抑制には決して応じない、というようにはっきりしたところがある。ここでは、意識的な生活形成への意志をはたらかせてやまない。事象の要求と人間のそれとのあいだの対立のきびしさがみとめられるが、前者ではさほどでもないことが、後者では容易ならぬこととなる場合がある。事象は、冷酷な要求によって人間を疎外しても平気であるが、当該の事象にこだわることによって、互いに即いたり離れたりする事柄が、それに対する人格的關係にある内容を与えることがある。その内容というのは、事象の圧迫に対して抵抗するところの人間の責務充実によって、その人格的關係への助け船となるところのものである。かくて互いに話し合い、互いに影響し合うことによって、事象のとり扱いかい打ち込もうとする動機が、あるいは喚起されたり押えられたり、あるいは尊重されたり無視されたりする結果が生じる。

事象の世界と交わりのそれとの関係を、以上のように抽象的に見てきたことが、次のごとき経験の内容と一致するといえる。もう半世紀以来のこ

とであるが、産業社会の中心問題が人間によってつくり出される事象関係のことではなくて、却って人間関係のこととなってきた。時代の生産諸形式がどしどし拡大され、技術的にもますます発展してきて、事象が急速な勢いで人間を圧迫するばかりではなくて、政治的の諸体系もそのイデオロギーによって、事象の虜となってきた人間をいっそう窮地に陥らせようとしてきた。ところがこの殺人的の形勢とは全く反対に、生産に従事する寄り合い仲間の間柄を、事象の圧迫から少しでものがれしめ、人間を、自分自身を信頼することによって少しでも強めしめるための努力において、ゼヒぬかりのないようにとの配慮が次第に見受けられるようになってきた。そこで正しい心構えが行き渡り、理解し合い、考慮し合い、助け合う、要するに連帯責任を果すことによって、上下の区別なくまとまりのある労働団体が出来上がる限り、いかに単調で骨の折れる労働とでも、うまく行なわれるようになるべきで、ただ事象事象とばかり考えられていたのに、ようやく交わりの世界がはっきりと前景に出ることになる。

2律背反が単なるそれでなしに合一することになるのは、連帯責任を果すことを前提とする。連帯責任を果し、交わりの世界に入り込むこと、これこそ事象の世界で進んではたらくことを可能ならしめる唯一の救いの道でなくてはならぬ。

リットは、このように論述して、あらためて教育の任務を次のごとく総括している。いったいわれわれの将来は、人間と人間とを結びつけるところの交わりが、事象の要求の重圧によって下敷きにならぬところに保障される。とはいっても、交わりの世界そのものは、おのずから形成され維持されるのであるから、特別に教育の世話を必要としない。事象の支配のもとにこの世界が降伏することがありはしないかとあまり懸念するにはおよばない。しかしこの世界が感心できない指示のもとにいじけたり、反対に活力のある生活のもとにますます勢いづいたりするのは、もっぱら関係者

の心情や態度の然らしめるところである。この場合の心情や態度は、教育的の骨折りに伴なうところの、何らかの本質的のものをつくり出そうとする存在諸力だといってよかろう。およそ社会的・経済的状态の発展は、交わりの世界を制肘するに比例して生じるので、何よりもまずその制肘を受けずに済むような諸力を形成するに足る教育が望ましくなる。その制肘に有効に対応するためには、われわれは、その制肘が由って生じる複雑な事情を見抜くことができるようにならなくてはならぬ。要するに、その制肘の威嚇を裏切るところの2律背反がわれわれに抬頭しなくてはならぬ。そうでないと、その威嚇を警戒する機会を見失ってしまう。かくて教育は、その仕事を、生長しつつある者に対する責任において、正しく把握するところの教育、すなわち「警戒への教育」(Erziehung zur Wachsamkeit)であるべきである。交わりにおいて脈打つ生活を台無しにすることに拍車をかけるような人間でないために、ぜひ必要なのは、警戒への教育でなくてはならぬ。それから自己を危険に陥れる事柄の種類・範囲について、ひと通りの理解をもちながら、その理解を私有しないで、共有財産にし、仲間同士に分ち合うことを心がけしめる教育によって、はじめて自己を危険に陥れる運命から救い出されるにちがいない。

人間形成をものにし得る諸条件を吟味するとき、これらの諸条件を考量する教育と人文的の「人格」本位のそれとの開きのはなはだ大きいことが痛感される。リットは、このように感得して、次のように結論している。教育と経済との接触点に教育的計画を立てるに当って、近代の労働生活の諸条件を——それらに適應する考慮をしりぞけて、一に内面性の硝子鏡のなかにある、ある陶冶を弁護する、少くともそうすることに傾き易いところの、その範囲内においてのみ、今日の教育的生活がもっとも力強く脈打つ、などという主張をしようとは思わない。2律背反の立場こそ支持されるべきである。事象にかかわりのある人間を忘れ去ろうとする、その一方的の主張にはとうてい賛成しがたい、と。

「交わり」の問題を中心として

リットの本の終節(第2章第11節)は、人間以外のものごととの交わりについて、さらに論述を進めているが、もはや予定の、与えられた紙幅を少々超過してしまったので、以上をもってリットの論述を追及する私の仕事を中止することにする。最後に、これだけのまとめ方をした私自身の感想を附記しなくてはならぬわけであるが、やはり紙幅の関係上、この記述を見合わすほかはなくなってしまった。リットのいうところに全部賛成する気にはならぬが、大体の点において教えられる点の多いことを附言して、これで不完全なこの論稿を終ることにする。